

# アユの細菌性出血性腹水病(通称シュードモナス病)の原因菌の増殖におよぼす残餌の影響

佐野 聡哉

## ◆背景・目的

アユ養殖において、給餌率が高いほど細菌性出血性腹水病(通称シュードモナス病)による被害が大きくなると言われている。そこで、給餌によって、水中における同病の原因菌(*Pseudomonas plecoglossicida*)の増殖が促進され、被害が拡大する可能性を検討した。

## ◆成果の内容・特徴

- ろ過滅菌した地下水および飼育水に*P. plecoglossicida*を接種し、生菌数の変化を観察したところ、少なくとも32日以上生菌数がほとんど減少せず、同菌は飼育水中で長期間生存することが明らかになった。
- ろ過滅菌した地下水に同菌を接種し、市販飼料を蒸留水に懸濁後ろ過したものを加えて、生菌数の変化を観察した。その結果、生菌数は急激に増加し、市販飼料から溶出した成分が同菌の増殖を促進することが明らかになった(図1, 2, 3)。
- これらのことから、病勢が沈静化しても残餌などが原因でシュードモナス病が再発する可能性が示唆された。

## ◆成果の活用・留意点

- 養殖現場の沈殿物中で同菌が実際に増殖していることを確認する必要がある。

